**会員としての断想**

　　　**鞍手支部　　加留部　謹一**

一　退公連は自らの生涯を安定させ、よりよい国づくりに寄与する。

　「退公連はメリットがない」と言って、辞退する人がいます。メリットという判断基準ではなく、退公連は感謝の組織体です。

　今在るわが身を思うと、長年月公務員として務めを果たすことができた結果であり、ありがたいことの一言に尽きます。

現職で貫いてきた全体の奉仕者の精神は、リアリズムに徹し、ロマンを追求することが生きがいだったように思います。

国難、逆境に遭遇しても、導いてくれたのはフランスの文化準類学者レウィストロースがいう「教育の最後の砦は肉声だ」という言葉でした。

これは教育に限りません。

　メリットもデメリットも全ての国の在り方も肉声が根元となり、力となってものごとを生み出していくということです。

退公連に身を置いて、全体に思いを巡らせ肯定的に肉声を発するとき、生涯を安定させるよりよき国を生起するように思っています。

　そこには、公務員として生かされてきた恩返しの思いがあります。

二　「生まれた」という受け身の生き方をする

　「生まれた」というのは受け身で、オースリアの精神医学者フランクルに言わせると「生まれたこと自体問いを背負っている」と解し、生きるということは、その「問い」に「答えることだ」というのです。

今もなお、私は赤点の答案の日々ですが、いつも欠点克服の答案が書けるのか、煩悩罪悪から逃れることができません。

こうした日々の中、厳しい戒めとなっているのは、後藤静香の「権威」の言葉です。

　　　　**これがために**

**たしかに生まれた**

**必要なからだ**

**たしかに生きている**

**まだ用事があるからだ**

**「われこれこれがために生まれたり」**

**はっきりと**

**そう言いうるものを**

**つかんだか**

**今のままで**

**おまえは**

**たしかに生まれた**

**何のために　生まれたのか**

**おまえは**

**たしかに生きている**

**何をすればよいのか**

**おまえは**

**たしかに死ぬ**

**今のままで**

**死んでもいのか**

　退公連は、「問い」に対して「答えていく」活動の一つだと考えています。

三　公務の精神は、社会全体に及ぶ「とも生き」の実践である。

　持続可能な社会とは、衣食住すべてが消滅し、再生していく循環社会です。「あらゆる存在に生命がある」として、全てのものを生かした江戸時代の生活に見ることができます。「因縁生起」という仏教用語がありますが、「因縁」とは、原因と縁ということ。「生起」とは生まれて起こるということ。「因縁生起」の行動をすれば、事物が循環して戻ってくるというのです。

　こう考えると、退公連の今からは次のようになることが肝要かなと思います。

１　人の話をよく聞き、よりよき方向に一歩踏み出す、と。

２　失敗やしくじりはより高みへ至る赤信号だと受け止めること。

３　太陽の下、多種多様の生命体があるように、共同体に偏りを作らないようにすること。

４　全世代型社会保障制度の確立に向け、「とも生き：を実践課題とすること。

５　感謝の祈りの日々を生きること。

６　会員加入の用件は、会員自らが退公連への所属感をもって活動に魅力を感じること。

７　退公連の行く先は必ずしも明確ではないが、望ましい世の在り方を探りつつ、未来を志向し、自利利他の実践を重ねていくこと。

　 （令和三年九月二十四日記）